

ステナイデア二〇一六

紙技フェスタ・トークセッション

チャツピー岡本 VS. 「新聞女」西沢みゆき

二〇一六年三月二十日（日） 国崎クリーンセンターゆめほたる

紙技フェスタ トークセッション

2016年3月23日(水) 国崎クリーンセンタゆめほたる



チャッピー岡本
カブリモノ作家



新聞女・西沢みゆき
アーティスト

第一部 カブリモノ変心塾 チャッピー岡本氏

「カブリモノ作家」のチャッピー岡本です、きょうはよろしくお願ひします。まず、私がなぜカブリモノ作家になったか、どういう仕事をやってるのかを、簡単に自己紹介させていただきます。

まず私の「チャッピー」という名前なんですけれども、これには意味があります。「CHANGE」＝「変わる」と、「HAPPY」＝「幸せ」。この二つの言葉を足して「CHAPPY」なんです。皆様をカブリモノで幸せに変えたい、という思いで、「チャッピー岡本」という名前で活動しています。

商品化第一号「阪神タイガース応援グッズ」

こちらは私の代表作、阪神タイガース応援グッズのカブリモノです。広げると一枚のペラペラのシートなんですけど、これをヒュッとくっつけて頭に被って、甲子園球場で「打てーッ!!」と応援するわけです。

球場が熱くなってくると、サンバイザーみたいな形にして日差しを遮り、もっと盛り上がってくると、その盛り上がる炎のような気持ちを表現して、「ファイヤー」と応援します。



まだあります。甲子園球場では、七回表の終了直後に、ジェット風船という長細い風船を飛ばします。その時に、これをこういふふう^{ふう}に被って、「よっしゃ、いけー」と飛ばすわけです。こんな風に一枚のシートでいろいろアレンジして楽しめるというのが、私のカブリモノの特徴です。

うさぎに変身「うさバイザー」

こんなサンバイザーもあります。パツと被るといううさぎに変身できる「うさバイザー」というものなんですけど、実は、皇太子夫妻の内親王・愛子さまがこれを被って乗馬をされたという。「宮内庁御用達」^{くわいしやうごようたし}のカブリモノです(笑)。



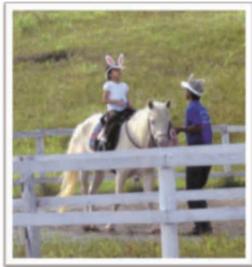
ファイヤー



サンバイザーに



うさバイザー



の写真が載ったんですが、私もう、びっくりしました、衝撃的。
メディア出演
そんなことで、関西テレビの「よ〜いドン!」という番組の「隣の人間国宝さん」というコーナーで田広志さんが来たり、朝日放送の「おはよう朝日」、毎日放送の「ちちんぷいぷい」など、多くのメディアに出演させてもらっています。



「おはよう朝日です」(朝日放送)



「よ〜いドン!」(関西テレビ)



「王様のブランチ」(TBS テレビ)



「ちちんぷいぷい」(毎日放送)



「ぐるっと関西おひるまえ」(NHK)



「す・またん」(読売テレビ)

「女性自身」という雑誌の巻頭カラーページに「うさバイザー」

カブリモノの魅力

私がまだサラリーマンだった頃、友人が大阪の「海遊館」という水族館で結婚式を挙げて、普通に出席しても面白くないし、せっかくの水族館ですから、「めでたい」と掛けて、自作の鯛のカブリモノを被って出席したら、これがばか受けしました。



「海遊館」では結婚式の後に、パレードが出来るんです。一般のお客さんがいる館内を、鯛のカブリモノが先導して新郎新婦とパレードをしたところ大騒ぎになりました。その時に「カブリモノってなんて楽しいんだろう」と思ったんです。自分も楽しいし、周りも喜んでくれる。「たかがカブリモノ、されどカブリモノ。カブリモノってすごいな」と実感したわけです。カブリモノってとにかく皆をハッピーにしてくれるし、一つのコミュニケーションツールだと思います。パッと意識を変えてくれる変心スイッチというところです。

カブリモノ作家になるきっかけ

サラリーマン時代、私はパッケージデザイナーでした。贈答品のパッケージなど、



三菱鉛筆「シゲノ」

開発の仕事に携わって、まじめに働いていたんです。これは三菱鉛筆の「シゲノ」という製品のパッケージですが、「世界パッケージコンテスト」というところで「ワールドスター賞」という賞をいただきました。

これは、クリスマス用のギフトパッケージです。雪の結晶を意識しました。

こちらは、テーマパークのお土産のパッケージです。

これは、CDパッケージです。これもたった一枚の紙なんですけれど、パタパタと折っていくとCDを収納するパッケージになります。この仕事で、一枚のシートを立体に組み上げるという技術を身につけました。

ところが、なんとなんと、2001年に勤めていた会社が倒産しちゃった。良かったのか悪かったのか。当時、結婚して二、三年で、幼い子どもがいて、再就職活動もしましたが、なかなかフィットするところがありませんでした。で、「いつかは独立」と思っていたこともあり、「人生一回、思い切って自分のやりたいことをやろう」ということで、カブリモノ作家に転身しました。転身したのはいいのですが、全然飯が食えなくて、どうしようと。



CD パッケージ



テーマパークのお土産



クリスマス用ギフトパッケージ

1シートのカブリモノ



© chappy okamoto

最初は、パッケージデザイナーとして独立しようと思っていたんですが、いきなりパッケージの仕事をお願いと営業しても、なかなか仕事は取れないですよ。そこで「カブリモノ作家」としてブランディングをし、差別化をして、自分の価値を高めようと思いました。

今まで培ってきたパッケージの技術と「海遊館」での素敵な思い出、カブリモノって楽しいなというのを掛け合わせて、1シートが一瞬で立体的なカブリモノになるものを作って、これを武器に乗り出していこうと考えました。それがスタートで、かれこれもう十四、五年やってますから、今までに作ったものは1000種類は超えています。その中で一番最初に開発したのが、阪神タイガースの応援グッズのカブリモノです。最初にパンと注目されたので運がよかったと思います。

カブリモノの聖地・奈良

今、私は奈良を拠点に活動しています。なぜ奈良かよく聞



かれるのですが、一つには、奈良がカプリモノの発信地、聖地でもあるということ。1300年前の奈良時代に、伎楽という仮面劇がシルクロードを伝って中国大陸から日本の奈良にやってきました。そこから能とか狂言とか、色々なカプリモノの文化が日本に広がっていきます。伎楽面というのはパントマイムの仮面劇ですが、国際的な特徴を持ったカプリモノが多いです。



1300年前に奈良に伝わった仮面劇

これも伎楽面の一種なんですけど、ペルシャの王様。鼻がすごく長いですよ。



ペルシャの王様

これは、迦楼羅というインドの神様です。



インドの神様

これは師子。日本の獅子舞の原型といわれるお面です。1300年前に中国から奈良に渡って、今に至っているという経緯があります。



師子



呉女

こちらは平たい顔ですね、やっと日本ぽくなってきました。これは、呉女。中国の美女ですね。そういうカプリモノをまたデザインし直して、奈良という地から世界に発信していきたいと思っています。

妖怪カプリモノ展

現在は、カプリモノの作品展、ファッションショーやワークショップなど、カプリモノでいろんな展開をしています。

これは去年、奈良での作品展「妖怪カプリモノ展」の様子です。私、最近妖怪に興味を持っています。実は、日本全国の中でも奈良県というのは、妖怪がたくさんいるんです。いるというか伝説がある。古くは日本書紀、古事記に



「妖怪カプリモノ展」(2015～2016)

しています。

奈良だけではなくて、一昨年くらいから、全国の妖怪カプリモノ展もやっています。これは山梨の蟹坊主というカプリモノですね。

ご当地カプリモノ

妖怪にこだわらず、全国の都道府県の特産物なんかをカプリモノにした「ご当地カプリモノ」の展覧会もやっています。

これは、宮崎の名産のマンゴー。マンゴーをかぶっちゃおうと。これは大阪、たこ焼き。たこ焼きだけじゃなく、パンチパーマ風たこ焼き。大阪の名物といえばおばちゃん。パンチパーマのおばちゃんなんで、それとたこ焼きを掛け合わせて、「たこ焼きパンチ」というカプリモノを作って、それを被っちゃおうと。ちゃんと頭の上に小さなつまようじが付いているんです。

世界のカプリモノ

世界のカプリモノも作っていて、今年も7月に奈良県で「世界のカプリモノ展」をやる予定です。

今年はオリンピック・イヤーで



一本だたら

もカッパとかいろんな妖怪がいきました。そういう伝説伝承を掘り起こして、1枚のシートが立体になるようなカプリモノにして、作品展をやっています。

こういう1シートが立体になるんですよとポスターにして、それを立体に組み上げたものを前に置いて展示します。これは「一本だたら」という奈良南部の山奥にいる一本足の妖怪です。

これ、皆さん御存じですよ、「砂かけ婆」。これ実はね、奈良に伝わってる妖怪なんです。こんなに有名な妖怪も奈良にいたと。これ、カッパですね。奈良では「ガタロ」というふうな呼び方を



蟹坊主



ガタロ



砂かけ婆



すよね。だから、世界で頑張ってる選手を応援するために、応援グッズとしてそれぞれの海外のカブリモノを作って、応援したい、エールを送りたい、ということで開催します。



作品展「世界スマイル計画」



エジプト・インドネシア・シンガポール



© 2010 Chappy Okamoto © www.kaburimono.com

カブリモノ変心塾

今日午前中にこちらの会場でもやらせてもらった、「カブリモノ変心塾」というワークショップもやっています。カブリモノを作って、楽しくハッピーに変身！身も心も楽しく変身しようというワークショップです。

一枚の紙に自由に色を塗って、用意した型で型どりをしして、切り抜くだけでオリジナルのカブリモノができちゃう。

北は北海道から南は沖縄まで、呼ばれたらどこへでも行ってやりますので、いつでも声を掛けてください。

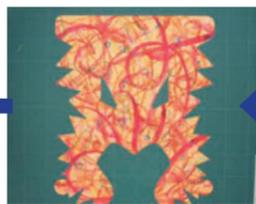
参加者は子どもさんが多いと思われていますが、家族で参加されるとお父さん、大人が一番楽しんで帰られます。

商業施設とか美術館、博物館、地方自治体と、いろんなところからオファーをいただいています。

「カブリモノ変心塾」は、2012年に「キッズデザイン賞」を受賞しました。これからもカブリモノで日本を元気にしたいと思っています。よろしくお願ひします。本日はありがとうございました。



色を塗る



型をとって切り抜く



カブリモノ完成



カブリモノ・ファッションショー

カブリモノの聖地の奈良をテーマにした、カブリモノファッションショーもあります。春日大社、平城京の朱雀門、第一次大極殿、五重塔や、青龍・白虎という「四神」などのモチーフで物語性のあるファッションショーを催しました。

近年の活動状況 ニューヨーク

「新聞女」の西沢みゆきです。よろしくお願ひします。まず、最近の活動を写真とともに紹介させていただきます。

こちらの写真は、3年前のニューヨークでの展覧会です。私の師匠で、嶋本昭三という具体美術協会の世界的な芸術家がいるんですが、ニューヨークの「グッゲンハイム美術館」で「GUTAI」の展覧会があつて、私にも正式にオフアアがあり、パフォーマンスをして、近郊のアーレンタウンにて、個展もやらせてもらいました。

これは、新聞のレースで作ったドレスで、中にライトが入っています。ニューヨークでは毎日、展覧会とか、テレビ出演とか大衆講義があつたんですが、全部その日その日に行事の為の作品を作らなければならなかったの、徹夜でやりました。

呼んでくれたキュレーターがすごい敏腕の方で、たくさん予定を入れてくれたので。私にとって初アメリカだったんですが、1か月半滞在させてもらったプロデューサーの家に空港から向かつて、そのまま徹夜で朝



ニューヨーク展覧会 (アーレックタウン「グッゲンハイム美術館」)

まで作つて、次の日に展覧会があつて、その次の日は、テレビ出演があつたので、その日もまた徹夜で、次のテレビ出演の衣装を作つて、1か月半、毎日次の日の作品を作り続ける、という日々でした。

ファッション雑誌・アート特集

これは、2年前。ファッション雑誌「Ginza」のアート特集のために作つたものです。

「Ginza」誌面にはモデルさんが、同じポーズで同じ靴とドレスで載っています。



ファッション雑誌「GINZA」ドレス着用

中日現代芸術展 オープニングパフォーマンス

私のホームページのトップ画面に、30メートルのドレスを着てクレーンに吊られた画像があるんですが、これは北京でのパフォーマンスの写真です。

中国の元・国家主席の李先念の娘の李小林さんが、私の師匠の嶋本昭三の大ファンで、「中日現代芸術展」のオープニングのパフォーマンスを頼まれて、私と先生がパフォーマンスをしました。この30メートルのドレスの写真はそのオープニングセレモニーの



日中現代芸術展 クレーンパフォーマンス



政府晩餐会

写真なんです。当時、私たちが日本でパフォーマンスをやっても、いつも「邪魔になる」と怒られるぐらい感心されない活動でしたが、初めて政府から

呼ばれたんです。

食事会も、テレビで見えるような政府の晩餐会でした。中国のシャンデリアみたいなのがあつて、そのころ流行っていた「千手観音」、中国の耳の聞こえないきれいな女の人たちが、何人も並んでいるのに、前から見たら一人にしか見えなくて、後ろからバツと手が出てくるものなんですけれど、その人たちも私たちにパフォーマンスしてくれたりしたわけです。

その後、私たちが歓迎してくれた中国政府の方たち、国家主席の娘さんたちが、関西の嶋本先生の家にお忍びで来ることになって、先生はお酒が飲めないで、晩御飯に連れて行ってやってくれと言われ、私たちは中国で歓迎されたので、逆に日本でどうしようと思つたんですが、思いついて阿倍野のジャンジャン横丁にお連れしました。その人たちはどの国に行つても外務省のこういう晩餐会にしか出たことがないので、ものすごい珍しかったようで、ジャンジャン横丁の栈敷の広いところに座つて、汚いところに初めて行ったので本当に珍しくて、めっちゃ喜んでくれました。

作品はいつも現地で作るんです。どこに行つても場所も時間もないので、ほんとにいつも2時間ぐらい。いつも一人か二人、三人ぐらいで。この時も、場所もないし言葉も通じないし、もうわーって必死で作業をして、夜2時間、朝ちよつと早く行って1時間ぐらいでやつたんです。

でも、当日のお客様は、政府主宰の国際会議のために来られた方々。各国首相など偉い人が新聞ドレスの下にいらしたと、後で聞きました。

クレーンも、戦時中とかに使ってたみたいな古いぼろぼろのクレーンが来て、この伸びる部分とかもがくがくしてまして、私はパラシュートを吊るためのシユラフを着ているんですが、その上のクレーンのフックが昔のものなので巨大すぎて、シユラフの輪っかが小さくて引っ掛からなくて、でも、そこが命がけの一番大事なことなんですよ。

私は高所恐怖症なので、すごく大事なところなのに、もう政府の方がオーケストラを鳴らして、司会者が「次は西沢みゆきさんです」とか言ってるので、すぐ上がらなきゃいけない。その輪っかがクレーンにはまらないからどうしようと思ってるら、そばにいたクレーンの運転士さんが、自分の首に巻いてた汚いタオルみたいなものを、「使いますか」と言われて。もうね、時間がないし、名前呼ばれちゃってるし、政府の人たちも見てるから、その組みたいなもので、クレーンと輪っかを結んでくれたんです。そのぼろぼろの紐で。私絶対これね、死んでしまうと思いました。でも、一応、吊られてます。すごい嫌でしたね、高所恐怖症なので。30メートルどんどん上にながって、びりびりびりって布の裂ける音がしてる間に下に下りてくることができました。

初期のパフォーマンス

私は2001年から「新聞女」をやっています。この写真は始めた頃、2002年ぐらいの仙台でのパフォーマンスです。

こちらにいるのが師匠の嶋本昭三。嶋本は、クレーンに吊られて、地上に30メートル角ぐらいの絵を描きます。クレーンに吊られ、空

プライズ結婚式をやりました。で、来場者、全くこの人たちに会ったことのない人たちも加わってこの人たちの衣装を作るといいます。これが出来上がった衣装です。新郎のジャケットがちょっと大きすぎました。

司会者

かわいらしいデザインですね。
西沢氏 はい。こちらは去年の10月かな、ナポリで展覧会をやったときのサプライズ結婚式です。

展覧会ときに私たちの後輩が入籍したと聞いて、本人たちには言わずに、サプライズで私たちがこれを作せたんです。

このウエディングドレスは30秒ぐらいで作ったんですよ。どうやって30秒で作ったかという、元は新聞トンネルだったんです。このトンネルが何かというと、「動く彫刻を作ります」と言ってる



ナポリ展 パフォーマンス サプライズ結婚式



スカイアートパフォーマンス (仙台)

ます。

大阪南港でのサプライズ結婚式

これは、結婚式なんですけど、大阪の名村造船所というところ。アートスペースの。アートのスペース

司会者 大阪南港

西沢氏 今はそうで

す。そこでアートのペントをやったときに、そのスタッフ結婚式を挙げていないというので、サ



新聞結婚式 (南港「名村造船所」)

から絵の具を落とすんですね。そうすると、下の画面に一瞬で絵ができるんです。それを何発も落とすと、大きな絵ができるんです。この下に見えるのは養生した水色のシートで、左側の白い端っこが30メートルぐらいあるキャンパスの端っこなんです。後ろにも白い人間が見えるんですけど、私たちは、キャンパスの一部なんです。人間キャンパスなんです。その私たちに絵の具が上空から投下されてきてい



動く新聞彫刻 (ナポリ)

この新聞トンネルを作り、中に人が入って動き回ったのです。トンネルの中でみんなが楽しく遊べて、この「動く彫刻」を30秒であのドレスに、ぐるぐるって巻



新聞トンネルの中 (ナポリ)



新聞ドレス (ナポリ)

き付けて、ウエディングドレスを作って。遊んでた子たちの中の二人が新郎新婦だったんで、すごいびっくりしていました。まさか自分たちが祝われるとは思ってなくて。

この「新聞ドレス」もナポリの展覧会場です。



鯉のぼりトンネル (スロベニア現代芸術国際フェスティバル)



鯉のぼりの残骸

スロベニアでの現代芸術国際フェスティバル

去年の秋にナポリに行く前に、いろんなところで展覧会をやりました。一つはスロベニアの現代芸術国際フェスティバル「City of Women」で、いくつかイベントをやったんですけど、一つはキッズプログラムで鯉のぼりを作りました。鯉のぼりの説明をするのに、英語がしゃべれなくて大変でした。

鯉のぼりは最後はいつもこうなるんですけど(下の写真)、みんなでおトクチュールのファッションにして、みんなこれ、欲しいって持って帰りました。

リュブリャナ市美術館「グッドニュース」

スロベニアの首都のリュブリャナ市の美術館でパフォーマンスをやったんですけど、これは「グッドニュース」というタイトルです。普通、新聞の中には、悲しいこととか苦しんでる人たちの記事が多いので、私はグッドニュースを願いたいなと思って。で、これはバッドニュースのお葬式と思って作りました。新聞を日本のお葬式に使うお線香で焼きました。

司会者 お線香。

西沢氏 はい。みんなで新聞を焼いてレース柄を作りました。みんないろいろ、花柄にしたり文字にしたりして作りました。

これが私の師匠。大学で出会って、私がアートをやるきっかけになった人です。世界四大アーティストと言われる嶋本昭三です。

司会者 存じ上げています。頭にマンホールの写真を映写してのを見せていただいたことがあります。

西沢氏 そうなんです。頭を作品にしている、頭の後ろに平和



師匠嶋本昭三と



「Good News」(リュブリャナ市美術館)

への願いの映画を上映して、アメリカを横断したりとか、ヨーロッパを横断したりとかしてました。その先生のアートの代表作には、頭のアートと瓶を空から投げて、一瞬でさっきの大きな絵を描くというアートがあります。そうです、先生のおかげで人生が変わりました。

個展「聖母出現」

これは、「聖母出現」という、去年の個展です。後でまた写真が出てくるんですけど、外国の人が私のパフォーマンスを見て、聖母マリアに似てるって言うんです。昔の神話にあるって、海外で何度も言われていたんですね。それで、「聖母」というタイトルにしました。



個展「聖母出現」
Photo Art: 小島和人ハモニズム <http://harmonism.jp/>

岡本氏 宗教法人か何か立ち上げ…
西沢氏 そうなんです。この写真を上げたときに、お清水とか、水晶とか売られるんじゃないかって(笑)。で、私、売りませんって何度も書いたんです。こういう写真は、アーティストのハモニズムさんの作品です、いつもコラボしてもらってるんです。

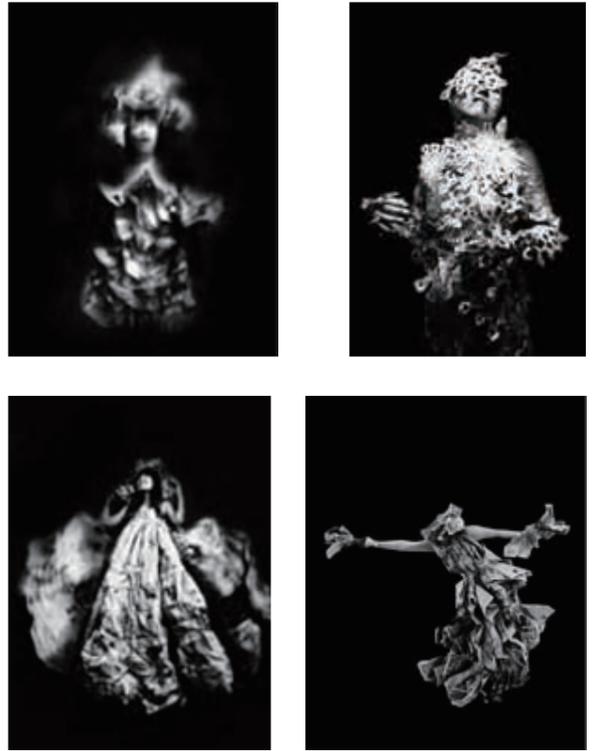
ニューヨークでの作品と新聞女ス

写真が何枚か続きます。私のお手伝いをしていてる皆さんにモデルになってもらって、写真の作品作りをしたんです。レースに切り抜いた新聞とか。

ニューヨークに行くときに、毎日徹夜で作らないといけないし、すごいたくさん作らなくちゃいけない。そしたら8人が10人ぐら

ニューヨーク新聞女's





その後輩やお友達が、みんな手弁当で、もちろんギャラも出ないですけれど、ニューヨークまでついてきてくれて、みんなすっごい頑張って作ってくれたので、そのおかげで1か月たくさんの公演ができました。

そのメンバーたちと行く前に、こうやってたくさん作品を作って持っていった、売ったりとかしました。

みんな行く段階では行きの飛行機賃しか持っていませんでした。でも、一杯向こうで仕事をもらっていたので、とにかく行かなくていいけれど、帰りの飛行機賃を持ってないことは考えないでおこうと言っていて、行きました。それで、この写真を5枚1,000円とかで売ったりとかして帰りの飛行機賃を稼ぎました。

目には見えないけれど、この世界の中には、私たちの御先祖さんや精霊の魂が一杯いるんじゃないかなと思って、見えない精霊を表現してみました。

司会者 チャッピー岡本さんの妖怪とつながるものがありますね。

パリ第八大学・ナポリ美術館

西沢氏 さっきの作品も、作ってくれたのはハモニズムさんです。これは、去年の春のパリ第八大学でのパフォーマンスです。移動中もずっとこの姿なので、ずっとみんなが見てくれて。

司会者 日本語なんですね、新聞も。

西沢氏 そうなんです。外国に行くときは、日本の新聞がすごい喜ばれるので。ヨーロッパでは特に喜ばれるので、日本語がよくわか



パリ第八大学パフォーマンス



ナポリ美術館前



巨大鯉のぼり (梅田スカイビル)



精霊祭り
Photo Art: 小島和人ハモニズム

鯉のぼりイベント

鯉のぼりはよくやるんですけど、これはかなり大きいです、人の大きさがこれなので。これはユニセフのチャリティイベントで、梅田の積水ハウスのスカイビルです。

精霊祭り

これは、去年やった「精霊祭り」という作品ですね。幽霊になったんです。東京ですごく有名な作家さんたちが集まって幽霊展があった、そのために作った作品です。

るように出しています。

この街中の写真も割と早い時期です。2004、5年ぐらいでしょう。ナポリの美術館に移動する間ですね。どこの国でもすごい人だかりになります。みんな外国語は解らないんですが、感想を言ってきたりとか、質問してきたりするんですよ。歩いている人、自転車の人、バイクの人、みんな止まるし、車に乗ってる人は、ビュンビュン通らなさいいけない車道なのに、停まって私に質問してくるので、ここから後ろが渋滞になってナポリ市警が来ました。美術館に来て「さっきパレードしてた人誰ですか」と。毎回怒られるので、またかなと思つたら、「帰りは警備が付きます。帰られるときは教えてください」と言つて。あ、パフォーマンス優先なんだなと思いました。

関西テレビコマーシャル

こちらは去年の春に関西テレビさんがイメチェンのために、関西



「聖母」(関西テレビCM)
Photo Art: 小島和人ハモニズム

のオモロイ人を集めてCMを作った時のです。これね、写真なんです。さつきから出てくる写真のような、絵画のようなのは、ハモニズムさんとのコラボで、これ自体を作品にしています。



巨大ディベア (神戸「元生糸会館」)

巨大ディベア

これも新聞です。神戸の元生糸会館は今、KIITOというコミュニティセンターになってるんですが、潰す直前に、どんなにめちゃくちゃしてもいいよって言われて。

司会者 改装前ですよ。

西沢氏 そうです。だから、これはまだ一般に公開されていない頃、神戸市が所有していて、工場機械が入ってるんです。

私たち、嶋本昭三の弟子たちは「A U」=「Art Undie ntified」といいます。そのグループで、全館使ってめちゃくちゃ面白い展示会をやったんです。で、私は、この神戸のごみ袋の中に新聞を詰めてディベアを作りました。

「記号学会」のゲストとして

これね、京都大学などの哲学の教授の人たちが、「記号学会」というのをやっていて、その学会のゲストに呼ばれたんです。で、私、



記号学会での新聞ファッション

学会ってヒエラル

キーがすごいらしいんですよ。知らないんですけど。右側の人なんか神戸大の教授で、最後には京大とか東大の教授になって「美学

会」の会長になりたいわけなんですけど、「今、会長の人に盾突いたら、もう一生なれないんです」と聞いたので、マジックを渡して、「会長に増毛してあげよう」って言ったら、したんですけど、その後、「もう自分の将来は終わった」と嘆いていました。

司会者 終わったかもしれないね。

西沢氏 「終わった」って言ってました(笑)。

次、こういうふうに、これ、周りにね、この先生たちがいるんですけど、先生たちもみんな新聞ファッションにしてあげたんです。で、その一番偉い吉岡さんは、最後にはすごい御満悦で、この真ん中に入って写っておられます。

熊本のパレード・巨大ドレスの宴会

これは熊本でパレードをやったときです。熊本現代美術館でワークショップをやって、みんな衣装を作ってパレードをしています。これは大宴会場で宴会をしたときです。ただの宴会では面白くないと思って、これ、一番奥の舞台の上に私がいるんですけど、私のドレスの裾がどんどん、どんどん伸びていって、宴会場を覆い尽く

学会って何をするとところかわからなかったんですが、ファッションの「着る」ということをテーマにした哲学の学会だったんですよ。

「ファッション美術館」に呼ばれて、その人たちが書いた文章を読んでも、単語の一つもわからなくて、全てが外国語ぐらい読み取れなくて、もう全く意味がわからない。

司会者 見たことのない漢字のオンパレードだったんですか。

西沢氏 そうです。日本語なんですけど、どこにも読み取れる場所がなくて。仕方がないので、その教授の人たちを見たことのないようなパフォーマンスでビックリさせようと思って、で、その人たち自身を作品にしようと思ったんです。自分が何か見せてもらえろと思ってると思うので、逆にその人たちが作品にしたらビックリするだろうと思ってですね。

この人は、その中で一番偉い、京都大学の吉岡洋教授という、記号学会の会長なんですけど、ちよっとわかるかもしれないんですけど、ちよっと薄いんですよ、毛が(笑)。で、彼を新聞ファッションにして、で、マッキーで今増毛したりというところなんです。



記号学会 (神戸ファッション美術館)



熊本パレード



巨大ドレスの宴会「Mariaのドレス」

したんです。中にみんなが入ってるんです。

外国人に聞いたのですが、マリアさまがドレスの中に貧しい民や困った民を入れて、加護をしていたという古い神話があるそうで、その絵画を見せてもらいました。私は作った当時は全く知らなかったんですが、それから、勝手にこれを「Mariaのドレス」としています。

宮城県知事賞

これも新聞アートを始めた2002年ぐらいでしょうか。宮城県知事賞と宮城教育長賞をもらったときの表彰式です。

司会者 表彰状が頭の上に付いているという。

西沢氏 そうですね。すごいありがたい表彰状なので、表彰状をもらっ



宮城県知事賞受賞

たその手で丸めて。
司会者 巻いたんですか。

西沢氏 そうです。

1位は教育長賞。こつちが県知事賞だったかと。多分、

そうですね。

司会者 一応、上下関係を守ったんですね。

西沢氏 そうですね。やっぱりすごいありがたい、またとない機会なので。受け取ってる写真も持つてくればよかったです。受け取った場所で、この表彰台の前で、その場でこう身に付けたんです。



エコ林幸子 (武の誰でもピカソ)

「たけしの誰でもピカソ」出演

これは「たけしの誰でもピカソ」のアートバトルに出たときです。これ、一応、「エコ林幸子」なんですけど、一応ね。紅白歌合戦で3億円ぐらい掛かるといっているので、これね、大体セットで3,000円ぐらいでできるようになっていきます。幸子さんの大きさもできると思いますが。残りの2億9,999万円、浮いたお金をね、いいことに使えるん

じゃないかなと思って、作りますよっていつつも言ってるんですね。まだ紅白には出ていないですけど(笑)。

動画の解説

(動画再生)

これ、スロベニアのNHKですね。お線香なので、新聞ドレスに押しつけたとだけ穴が空いたり。ちょうど美術館前でやってたので、道行く人もどんどん加わってきて。

これはニューヨークのグッゲンハイムでやった巨大な新聞。巨大な新聞をグッゲンハイムの底に敷き詰めて、アメリカ全土から友達がボランティアスタッフが来てくれて、号外新聞を作ってくれたんです。これも出る寸前に裏で作って。

これ、すごい素敵なイベントです。夕方に美術館を一回閉めて、もう一度夜に開いて、ゲストを呼んで、DJとパフォーマンズを楽しんでもらいながら、お酒を楽しめる「アートアフターダーク」というイベントを1か月か2か月に1回やっていて、そのゲストに呼んでもらったんですが、1,000人か2,000人ぐらい来るんですよ。ニューヨークの最先端のおしゃれな人たちが。それで、そのDJをするのに、私、音楽が全然駄目で、私の周りにプロのミュージシャンが多いんですが、だからこそあえて誰にも相談しないでおこうと思って。

それで、自分の知っている曲にしようと、植木等とか美空ひばりとかドリフターズとかの曲を友達に頼んでかけたんですよ。そして、向こうでマライヤキャリーのプライベートパーティとかのDJの人とミュージシャンの人たちが来ていて、今まで聞いたDJの中

で一番すごい、すごい、DJがすごいとかいって、めっちゃ褒められて。

司会者 ズンドコ節とか流れたんですか。

西沢氏 そう、そうなんです、そうなんです。お座敷小唄とか。

司会者 それ、リミックスしたんですか。

西沢氏 いえ、そのままかけたんです。

(動画再生)

これ、音楽は聞こえないんですけど。下のは動く脚立ですね。下のほうに滑車が付いている脚立で。後ろにドレスが何メートルも伸びてるんですが、「Please walk under this」と言ってる、「このドレスの下を歩いてください」という作品なんですけど、「この上を歩いてください」という嶋本昭三の作品があったんですよ。作品って見るものだけど、先生の作品はその上を歩くものだったので、その一応、オマージュで、この下を歩いてください。

(動画再生)

もう、膨らもうとする瞬間から、もう下りたいって気持ちです。なんかあれですよ、罰ゲームされる芸人みたいな、そういう感じ。罰ゲーム気分です、いつも。

司会者 ありがとうございます。見入ってしまいました。せっかく作品を見ながら楽しい時間が過ごせたので、ちょっとみんなで話をしながらやったほうがいいかなと思います。

私から質問なのですが、チャッピーさんと西沢さんのお二人にぜ

ひ、どこかでコラボしてもらえませんか。

西沢氏 ぜひ、ぜひです。教えてほしいです。

岡本氏 可能性がすごいあるなと思います。

司会者 紙の文化で何か二人で、コラボレーションのイメージがすごくわいたんで、どこかでやってほしいなと思いました。それで、新聞女さんに聞きたいのは、実は私、同じ年なんですよ。

西沢氏 そうなんです、猿の会です。

司会者 「具体」の方々と、実はちょっと活動させていただいて、松谷さんとかですね。

西沢氏 こないだ松谷さんの家に行っただす。

司会者 パリのですか。

西沢氏 そうです。松谷さんの。

司会者 今、記録映像を撮ったりとかしてるんですけど、普通のことをするというのが、「具体」の。

西沢氏 「具体」のことを知らないかたもいらっしゃいますよね。もともと1950年台に活躍していた、今生きてたら九十歳代ぐらいの先生たちなんですけど、人のまねをするなという、吉原治良の教えのもとに集まったんです。で、先生たちの中には、筆を使って絵を描く人は一人もいなくて、部屋の真ん中にひもでつるされて、部屋の床がキャンバスで、足の裏を使って自分が振り子のように揺られながら絵を描く人とか、筆以外のものを全員使ってるんですよ。

司会者 今ちょっと注目を浴びていて、アメリカでも企画展みたいなのがあったと思います。それはそれとして、何で新聞なのかをお聞きしたくて。何で新聞、古新聞というものを選んだのか。

岡本氏 それが一番聞きたいですね、僕も。

司会者 何かきっかけが何かあったんですか。

西沢氏 幾つか理由があるんですけど、ほんとのいい話の理由は、私が見んなに喜んでもらいたくてやっているの、私が作ってみんなに見せるだけという感じじゃなくて、「いつでも」「どこでも」「誰でも」が簡単にできるアートをやろうと思って、ごみとしてある新聞を使いました。そしてみんながハッピーになって欲しいアートなのに、新聞の中にいる人たちは、苦しんだり悲しんでる人しかいないので、その新聞を使ってアートをして、社会的な問題を解決する力は私には全くなくても、私はアートしかできないので、自分にできるみんながハッピーになれる方法で、新聞の中にある大きな問題も、そういううちっちゃいハッピーが積み重なって解決できるんじゃないかなという思いでやっています。

司会者 ハッピーつながりですね、ある意味ね。

岡本氏 そうですね。

西沢氏 それと、2001年に会社が倒産したと聞いて。うちの主人がやっていた商売が駄目になって、もう無一文じゃなくてマイナス、一生で返せないぐらい多額な借金ができましたよ。で、その借金を返さなきゃいけないのに、私も会社を辞めたんですよ、企業デザイナーを。それは辞めたんです、主人のは潰れたんです。自分の事業が。で、すごい巨額な借金ができたけど、うちの旦那さんは、もうこれは、死んで返さなきゃいけないんじゃないかなと思っただけなんですけど、それは、楽しく、何て言うんですか、貧乏を楽しんだらどうかと思う。で、新聞のアートは、お金がなくても

が乱立したことがありましたね。あの辺の何かこの紙との関わりとどうか、そういうところをちよつと、作品と合わせてお話していただけますか。

岡本氏 そうですね、あれはいわゆるカラーセラピーの領域の話なんですけれど、人間の感情というのは、知らず知らずのうちに、そのときに欲している色を選んだりするわけです。で、自分の精神状態のバランスを保つようにできてるらしいんですよ。だからそのときに、今日の気分で好きな色の紙を取っていいよって言って、その選んだ色によって、その人の今の精神状態がわかるんです。

例えば、黄色の紙をぱつと取った子は、もつとコミュニケーション取りたいんだなど、積極的にワークショップのときに話しかけて、そうすることによってもっと楽しませてあげようとか、ブルーの紙を選んだ子は、どつちかという一人で静かに作りたい精神状態な感じで、余り積極的にはこつちから話しかけないとか、というふうにいるいろいろそのときの状況を見ながら、より楽しませてあげられるように声掛けをしたりとかという活動をしています。

司会者 だけど形もね、デビルマンはすごいとげとげしいデザインで、前、一緒にやったときには、黒い紙でデビルマンを取る主婦の方が多かったんです。いかにストレスがたまってるか。

岡本氏 それは、ダークな部分が結構あったりするかもしれないですけど。

西沢氏 ストレスの人が黒ですか。

岡本氏 そうです。震災の被災者もああいいう色を塗ったりします。絵を描くワークショップでは、まず、色が出てこないんです。もう

きるじゃないですか。だから、やむを得ず新聞になったというのがあります。使える物が何もないから。だからそれは、表向きにはあまりいい感じじゃないので、一応、別のいい感じの理由を言ってます（笑）。だけど、お金がなかったからというのは、ぶつちやけ大きな理由です。

司会者 手に入りやすい素材で、そういう事情があつてということですね。新聞って面白い。新聞には記事が一杯書かれていますよね。今、ハッピーな記事とおっしゃってたんですけど、さっきの神戸なんかのを見ると、例えば震災の当時の記事で新聞を集めてみたりとか、例えば、政治的なパフォーマンスに取られがちなことってないんですか、新聞記事で。

西沢氏 ありますね。政治的なことを直接的には使わないですけど、でも、新聞の記事をより分けて使ったりはします。9・11以降に、「ピースロード」という作品にして、9・11の記事ばかりで作ったピースロードで世界一周つなげたいという作品で、最初、神戸から元町駅から西元町駅まで1,200メートルつないだんです。それを世界中いるんなところでやって、1部ずつないで地球を一周ぐるつとつなげたいという作品をやっていたりとか。去年のパリのピースロードはテロの後だったので。

司会者 では、ちよつとチャッピーさんにお聞きします。以前、一緒に活動させていただいたとき、ワークショップするときは何色か紙を用意して、選んだ紙によってその日の精神状態とか、選んだ形態によって、その人の今の心の持ち様みたいなのがわかると解説してもらったことがあつて、三田でやったとき、黒いデビルマン

完全に自分の感情を押し殺してしまつて。だから、嬉しい・楽しいという赤い色、黄色とかピンクとかの色が出てこなくて、黒しか出てこないとか。あと、血の色の赤とか、そういうのばかりが出てくる。元氣だとカラフルに虹の色もぱつと出てくるんです。

司会者 新聞って無彩色じゃないですか、白黒で。その辺の何か色とか意識することってあるんですか。

西沢氏 最近は多色刷りも多いので、ドレスをデザインするときには色の部分を多く使います。国によって色の傾向が違いますよ。それをいつも面白いなと思っていて、中国は赤が好きだから、作ると赤い面が多かったり、韓国はパステルカラーの薄いパープルとかパステルグリーンとパステルブルーとか多かったです、インドは黄色と紫が多かったり、イタリヤはピンクが多かったりとか、新聞の違いもなんか面白いですね。

司会者 さっきの話で、日本の新聞が海外へ行くと好評だというのは、何か紙質が違つたりするんですか。

西沢氏 日本の新聞の紙質は世界一いいです。全然違うんですけど、やっぱり柄が面白いみたいです。見た目に。日本の漢字が。

岡本氏 漢字が。

司会者 記号に見える。

西沢氏 平仮名とか。

司会者 もう一回チャッピーさん、基本、立体じゃないですか、造形的な。1枚の紙からああいいう形が浮かんで出るんですか。大体こうしたらこういう形になるという風に。

岡本氏 今は大体出てくるようになっていきます。それは、前職でパッ

ケージのデザイナーを十数年間やってきたので、この立体を作るんだっただろうという展開図にしたらいいかというある程度のパターンを覚えてるといふか。

司会者 それは特殊能力ではないんですか。

岡本氏 特殊能力ではないです。十年間積み重ねた経験です。パツケージを発見したらすぐに展開して、「ああ、こういう展開図になつてらんや」というのを繰り返してやってきたんで、今では大体わかるようになってきました。

司会者 以前、ある市でひと月に集まる段ボールを全部ミュージアムで引き受けて、家を建てるというワークショップがあつたんです。そうすると、段ボールの箱に影響を受けるんです。一番大きな段ボールは冷蔵庫の箱なんですよ。その取り合いっかが始まるという。そういう何か平面ではなくて立体的なイメージを持たせるのって、物作りに大事だと思ふんですね。特に僕らは建築を学んできたのでそう思います。

新聞女さんも、チャカチャカつて作っているようですが、立体イメージから入つてるように思ふのですが…。それは訓練された部分もあるとは思いますが、何かこういう形とかがパツと浮かぶんでしょうか。

西沢氏 そうですね、浮かびますね。ふだん生活の中で色々な物を見たり、イメージしてるものが蓄積されてるんだと思ふんですけれど。なんか思い浮かびます、フラッシュのように。お風呂に入ったり、おやつを食べたり、飲んだりしてるときに、あ、あれ作りたい、とか。

司会者 最後にチャッピー岡本さん。奈良にお住まいということですが、奈良は日本の文化の始まりのような土地ですね。シルクロードの終着点で、いろんな世界中の情報とかものが当時集積してた町だったのが、京都に遷都して、京都と奈良の対比論みたいなのがあるんですけれど。

奈良には結構面白いものがあるのに、発信力が余り上手ではなくて。そこでこういうものを発信されてるといふのに、すごく興味が持てたんです。

岡本氏 もともと私は大阪の人間なんです。大阪で育つて結婚して奈良に移りました。住んでいるうちに奈良にも面白いものがたくさんあることがわかつて、すごくもつたいなと思つたんです。

京都なんかは商売上手で発信上手ですが、奈良は全然。大仏商法というか、何もしなくても勝手にお客さんは来てくれるし、「そんな儲けんでもいいわ」みたいな意識があるのでしょうか、もつたないですよ。